

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：21101
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2022
 課題番号：16K02429
 研究課題名(和文) 旧日本映画社撮影長崎原爆映像の超高度精密化と関連資料等による歴史的記録性の確立

研究課題名(英文) Ultra-high-resolution (4K recording) of Nagasaki atomic bombing footage shot by the former Nippon Eigasha (Japan Film Co.) and establishment of historical documentation using related materials, etc.

研究代表者
 横手 一彦 (YOKOTE, Kazuhiko)
 青森公立大学・経営経済学部・教授

研究者番号：60240199
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：2K被ばく記録映像から、4K被ばく記録映像を作成(映像資料)し、研究の基礎資料として、145枚の画像資料を切取った。それら画像に相当する、あるいは対応すると推定する、主として長崎市浦上地区を実査した。また、各地点を撮影した。その一事例を一頁内の上下段に併置して、145事例の『記録集』視覚資料と作成した。
 また市内踏査や資料発掘に努めた。被ばく証言や具体例などを含めた文字資料を作成し、145画像の視覚資料に対応させた。一つの視覚資料に、一頁の文字資料を付して、計二頁を基本とする一事例(一場面)として、紙媒体の資料集『記録集』(私家版)を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日的な立ち位置から、長崎原爆に関する「事実」を積み重ねた。『記録集』(私家版)には視覚資料(被ばく画像・現在の長崎市内の被ばく地点)と、文字資料(被ばく証言・関連資料・市内踏査)を併置した。それらは、限定的で、個別的である。しかし被ばくの現実を具体的に明示する。原爆の犠牲者という歴史的な出来事に対して、今日的な記録や理解の不足を再確認する問い掛けでもある。
 被ばく者(当事者)の直接的な語りは、遠からず、確実に消滅する。個人の証言に依拠し、被ばく後を構想する手法に、自ずと幾つかの困難や限界が生じている。現状の未達に対して、被ばく画像を史的に位置付けることに本研究の意味があると思う。

研究成果の概要(英文)：I made 4K recorded images of radiation exposure (Video Materials) from 2K recorded images and used them as the basis for my research. 145 images were cut from the Video Materials. I conducted a field survey of the Urakami area of Nagasaki City, which corresponds or is estimated to correspond to those images and took pictures of each point. I placed one of the cases on the top and bottom of each page and created a "record collection" (visual materials) of the 145 cases. I also conducted site inspections and excavated materials. I prepared "textual materials," including exposure testimonies and specific examples, to correspond with the "visual materials" of the 145 images.
 A "Record Collection" (private edition) was created as a collection of paper-based materials (one case (one scene)), with one page of "textual materials" attached to each "visual material," for a total of two pages.

研究分野：日本近代文学

キーワード：長崎原爆 長崎(浦上)原爆 長崎原爆映像資料 長崎の被ばく画像記録 旧日本映画社 長崎原爆文学

1. 研究開始当初の背景

1945年8月東京帝大医学部は、陸軍軍医学校や理化学研究所と協力して調査団派遣を決めた。9月日本政府は、独自の判断によって、「文部省学術研究会議原子爆弾災害調査研究特別委員会」設置を決めた。旧日本映画社は、同特別委員会の補助機関に位置付けられ、被ばくの現状を記録する映画製作を担当することになった。

9月下旬から10月にかけて、広島市及び長崎市で撮影が行われた。長崎(浦上)原爆の撮影は、長崎市内に上陸した占領軍(GHQ/SCAP)干渉によって10月下旬に中断した。同年12月21日から翌年1月25日にかけて、米戦略爆撃調査団委託事業として、米軍人の立ち会いのもと、長崎市内の構造物被害や被ばく者治療や市街地惨状の撮影が再開された。

1946年2月撮影映像の編集作業に着手し、4月21日に映像資料が完成した。5月1日に旧日本映画社内にて長崎編試写が行われ、5月4日に東京の日比谷公会堂で、米軍関係者を集めた試写会が開催された。

他の映像資料と比較し、敗戦国の要員が傷付いた国土と人びとを撮影し、被ばく時の「事実」に最も近く、最終版の、最良の形態を保持し、事後的な解釈などのない、フィルム素材から研究を立ち上げるため、旧日本映画社の映像記録を保管し、権利を有する会社から、学術研究に限るとの条件を付して、利用許可を得た。また事前に相談し、幾人かの被ばく者の助言や協力を得られることにもなった。

2. 研究の目的

長崎(浦上)原爆を、視覚資料と文字資料から補訂や追補する手立てを得た。このことが、本研究の着眼点である。上記のような経緯による被ばく直後の記録映像である。撮影時の未編集フィルムに拠り、映像を視覚資料として読み取る。本研究は、必ずしも映像化されていない場面や事柄などを追記して、被ばく直後の「事実」の一端に向き合おうとする資料収集と調査と考察と論究を目的とする。

3. 研究の方法

3-1 先端的な映像技術によるアナログからデジタル(4K)映像の制作。SD画像の解像度は、縦(720)×横(480)で35万ピクセルである。フルハイビジョンFULL-HD画像(2K)は、縦(1920)×横(1080)で207万ピクセル。4K画像は縦(3840)×横(2160)の830万ピクセルで、FULL-HD画像(2K)の4倍の画面解像度である。研究計画の立案時は、この水準が画像処理の一般的な技術の限界であるといわれた。

この作業によって、被ばく時に、瓦礫と見なされた映像の細部や暗部が部分的に分析することが可能になった。そのことは、被ばく以前の日常性を部分的に再現することに通じる。具体例として、被ばく後に遮蔽物が焼失した校庭において、横並びに掘られた防空壕を4K映像資料に判読することが出来る。

また4K映像を見定める細部への関心は、新たな対象物を見出し、分析し、位置付け、読解することに広がる。具体的に列記する。火傷、傷痕、病院、治療、救護所、避難所、

看護、遺体処理、瓦、鉄骨、コンクリート、熱線、崖岩、植物、竹、爆風の威力、黒い雨など。

3-2 視覚資料 と個人所蔵画像など。4K映像からの 切取り画像 に基づき、撮影ポイント毎に現在の地点を重ね合わせた(撮影画像)。切取り画像 と 撮影画像 を合わせて 視覚資料 とし、撮影ポイント毎に作成し、関連資料などを付記した。各撮影ポイントの推定や確定は困難を伴う調査で、撮り直しや撮影場所の移動などを繰り返した。また許可を得て、個人が所蔵する旧浦上天主堂の画像などを併載した。

3-3 145 場面の事例集。主な 切取り画像 の地点や被ばく遺構は、以下の通りである。この場面選択に従い、 撮影画像 や 文字資料 を整えた。また同一地点や被ばく遺構であっても、複数の映像が記録されている。そのため、地点などの重複がある。原爆投下中心碑、浦上刑務支所、旧長崎医科大附属病院、浦上駅、三菱製鋼場茂里町工場、三菱長崎兵器製作所大橋工場、三菱長崎造船所浜口町三菱工業青年学校工場、新興善国民学校特設救護病院、救護状況、南山手、飛行場建設、ガスタンク、下の川電停付近、山里国民学校、城山国民学校、鎮西学院、旧浦上天主堂、中町天主堂、山王神社、長崎駅付近、国道206号沿い、浦上川沿い、梁川橋、常磐橋、松山町、浜口町、駒場町、竹の久保町。

3-4 被ばく証言などの記録的な文書 文字資料 の併記と資料の発掘。切取り画像 に相当する(あるいは推定する)現在の長崎市内の地点を定め、 撮影画像 として記録し、それらの画像収集に努めた。後日、それらの画像を取捨選択し、必要に応じて再撮影をおこない、『記録集』(後述)1頁の上下段に併載した。このことによって、70年余りの時間軸による変化と空間構造の部分的な変貌を視覚化した。爆心中心地からの距離や方角や撮影カメラの向きなどを検討し、また 切取り画像 に対応する(あるいは推定する)被ばく証言などを追記した。それらの作業内容と分析的な考察から構成される一事例として、それらを『記録集』にまとめた。

3-5 多様な資料による追確認など。長崎原爆資料所蔵資料や広島平和記念館所蔵資料を収集し、それらに多くを学んだ。また、長崎市立図書館救護所メモリアル展示パネルや、長崎市内の各所に設置されている被ばく遺構説明板(長崎市長崎原爆資料館製作)の記録や「事実」を確認し、『資料集』の補訂を重ねた。また出口輝夫「昭和20年8月長崎市地図」(2010年ゆり書房)など、多くの先行研究に導かれた。加えて、拙著『長崎 旧浦上天主堂 1945-58 失われた被爆遺産』(2010年岩波書店)や同『長崎(浦上)原爆体験の記録 被ばく直後に運行された臨時救援列車』(2014年私家版)など、これまでに積み重ねた記録や「事実」などを、『記録集』に援用した。さらに、多くの被ばく者の手記や証言などを読み継いだ。

4. 研究成果

4-1 145事例の場面集における 文字資料 の重要性。視覚資料 (切取り画像 と 撮影画像)と 文字資料 (被ばく証言など)から構成される145事例の場面集を制作し

た。新規 視覚資料 は、貴重である。

異なる媒体を融合的に組成する新規性によって、また発掘資料などで関係付けることで、そこに従来にはない力強い再現力が生成し、そのことで長崎(浦上)原爆に関する記録性が高まったと考える。改めて、文字資料 が持つ説得力を確認した。

具体例を記す。浦上駅下りホーム側より、三菱製鋼所茂里町工場方向(川口町)の駅周辺の人や荷役用馬の死体が散乱する様子を証言する田川清光『炎の中から』。同じ悲惨な光景を証言する藤木タカ『娘の死を偲びて』など。

4-2 個人所蔵資料など。視覚資料 (切取り画像と撮影画像)と 文字資料 (被ばく証言など)から構成される145事例の場面集の制作に関して、個人所蔵画像や資料を併載する許諾を求めた。また公的な施設において、関連資料の発掘に努めた。

具体例を列記する。被ばく後1年あまりの後の個人撮影スナップ三写真の例示。三菱長崎兵器製作所大橋工場(長崎大学文教キャンパス)の復元地図を見出し、林京子や柳川(石田)雅子の被ばく地点の確定。三菱長崎兵器製作所大橋工場における柳川(石田)雅子の被ばく体験と個人所蔵スナップ写真(石田壽撮影)。三菱長崎造船所浜口町三菱工業青年学校工場の戦前の木造の正面入口画像。個人所蔵(故古賀信夫撮影)の旧浦上天主堂外観や天主堂内部の画像など。

4-3 被ばく証言。被ばく証言運動による成果は、貴重な地域の生活記録である。それは、戦前の生活綴り方運動を引き継ぎ(国分一太郎など)、戦後の日本作文の会などの表現活動などに重複し、各地域に根付いた、人びとの地道な活動を基本にすると位置付けた(渡辺千恵子「十一年の証言」・『日本の原爆記録』)。

1952年8月『アサヒグラフ』が、初の原爆被害を 視覚資料 を多用して特集した。ガリ版刷四四頁小冊子『長崎の証言』第1集は、1969年8月発行された。その他の媒体含め、これまで延べ1000人以上の被ばく体験が文字化されたといわれる。戦後の民衆史の確かな一分脈の形成である。『記録集』を、1つの、そのような系統性の上にある現在形と位置付ける。

4-4 被ばく証言運動の人的な関連性(初期段階)・交差と生成。被ばく証言運動は、秋月辰一郎『長崎原爆記』(1966年弘文堂新社)や、鶴見和子『殺されたもののゆくえ わたしの民俗学ノート』(1985年はる書房など)などが主導し、また積極的に関与した。それらの交差が、理論的な励ましとなり、現実的な支援ともなり、動的な運動体が生成したと分析する。

被ばく証言運動は、縦糸として辿れば、鶴見和子を通じて柳田国男や南方熊楠の在野の巨大な知性とつながる。横糸として辿れば、戦前の生活綴り方運動を引き継ぐ1950年代後半から六〇年代にかけての各地の動きがあった。水俣や四日市や新潟などの幾つかの地域で、多くの人びとが、地域固有の課題に向き合った。市民の学習活動などは、地域的な課題に対する関心へと傾斜し、増幅し、主体的な活動が形成された。被ばく証言 運動(鎌田定夫など)は、小集団の歩みに始まり、被ばく地における、大きな、確かな、社会的な働き掛けに進展した。

その積極的な働き掛けが、時には私的な体験を記録する抵抗感を和らげ、証言活動は拡大した。その庶民史は、世界史的な文脈に再置される生活記録ともなった。また、現在の欠落で補う生活記録である。

4-5 『記録集』。本研究は、視覚資料 比較や 文字資料 などを再確認する意味合いが強く、紙媒体報告書『旧日本映画社撮影長崎原爆映像の超高度精密化と関連資料等による歴史的記録性の確立』(2023年私家版・分担者 山口大学人文学部野坂明雄)を制作した。必ずしも、紙媒体資料の制作と提出が求められていたのではない。

4-6 『記録集』の公開。成果の公開は、観光旅行者、修学旅行生、行政の担当部局、他領域研究者、次世代研究者の関心を新たにする、一つの、具体的な手掛かりである。記憶の堆積に、半ば埋もれていた過去が甦り、語り尽くそうとしても、尽くせない、新たな過去が露出し、掘り起こされる。

4-7 三位一体形式。被ばく証言は、三位一体形式 (体験+記憶+証言)による語りである。この形式は、当然のこととして、後退し、やがては消滅する。平行して、非体験者が非体験者に語る対話型の語りの在り方が模索される。『記録集』は、それらを、問い直しながら問い続ける資料の1つと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 横手一彦	4. 巻 12
2. 論文標題 「被占領下の被ばく表現」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『リテラシー研究』（早稲田大学教育学和田敦彦研究室内 リテラシー研究会発行）	6. 最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横手一彦	4. 巻 101
2. 論文標題 「非資料と 資料 と研究と」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本近代文学』	6. 最初と最後の頁 81～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野坂昭雄	4. 巻
2. 論文標題 「原爆と ひと ジョルジュ・ムスタキ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『原爆文学研究』第17号	6. 最初と最後の頁 151-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野坂昭雄	4. 巻
2. 論文標題 「原爆と ひと 濱本武一」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『原爆文学研究』第17号	6. 最初と最後の頁 156-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横手一彦	4. 巻 第62号
2. 論文標題 「ことばの側に立つ・細部を構想する力 長崎(浦上)原爆を事例に」(講演再録)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『国語研究』	6. 最初と最後の頁 8 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野坂昭雄	4. 巻 第15号
2. 論文標題 「原爆写真というメディアと 詩 」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『原爆文学研究』	6. 最初と最後の頁 86 - 100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野坂昭雄	4. 巻 第20号
2. 論文標題 中山士朗「死の影」における主体の構成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『原爆文学研究』	6. 最初と最後の頁 112 - 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 野坂昭雄
2. 発表標題 「戦後広島詩壇における濱本武一と政田岑生」 広島大学
3. 学会等名 広島近代文学研究会2018年秋季例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横手一彦
2. 発表標題 「ことばの側に立つ・細部を構想する力」
3. 学会等名 第62回長崎県高等学校・特別支援学校教育研究会 国語部会 長崎県立長崎東高等学校 2017年10月20日（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野坂昭雄
2. 発表標題 「古典再読 峠三吉 『原爆詩集』」
3. 学会等名 第51回 原爆文学研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 横手一彦
2. 発表標題 「長崎(浦上)原爆への試論的接近」
3. 学会等名 日本近代文学会東北支部
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 横手一彦
2. 発表標題 小さな記録の再現 長崎(浦上)原爆の 視覚資料 と 文字資料 を括る
3. 学会等名 日本近代文学会東北支部
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 横手一彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 南方新社(鹿児島純心女子大学国際文化研究センター発行・(363頁～376頁))	5. 総ページ数 446
3. 書名 「鹿児島県被ばく者の無言の語り 個人名と場所と」(古閑章編『新薩摩学』第15巻所収)	

1. 著者名 編著横手一彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店(2010年発行の復刊)	5. 総ページ数 98
3. 書名 『長崎 旧浦上天主堂 1945 - 58 失われた被爆遺産』	

1. 著者名 野坂昭雄	4. 発行年 2017年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 388
3. 書名 川口隆行編著『原爆を読む文化辞典』所収 「『死の灰詩集』論争」 PP.35-39 「核SFと核批評」 PP.203-207 「核・原爆を撮る」 PP.234-238 「性愛」 PP.291-295 「核廃棄物処理場」 PP.370-374	

1. 著者名 横手一彦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 377
3. 書名 旧日本映画社撮影『長崎原爆映像の超高密度精密化と関連資料等による歴史的記録性の確立』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

紙媒体報告書『長崎原爆映像の超高密度精密化と関連資料等による歴史的記録性の確立』は、予算の範囲内で15部を作成した。国立国会図書館に1部を納本し、他は公的施設などに献本した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野坂 昭雄 (NOSAKA Akio) (20331936)	山口大学・人文学部・教授 (15501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------